

ヨーロッパの旅

平井信義

カラカラの浴場は、私にとって終生忘れ得ない思い出を作ってくれた。それは、浴場の一隅に装置された大きな舞台上、満天の星を仰ぎながら、歌劇「オセロ」を見にいった晩のことである。

その日の前日、朝早く目がさめると、窓外にはもうぎらぎらと夏の太陽が輝いていた。私はベッドの中で地図をひろげ、今日一日の行動の計画を練りながら、朝食に決められた時刻になるまでの時間を楽しんでいた。ローマの南の郊外を、カラコムブの墓場まで歩いてみようという計画で、その道にはローマ帝国時代の古い土塀が続いている筈であった。そして数々の墓地——それは、クリスト教徒が迫害された時代に、遺体をこっそりと埋めるために作られたもので、地下に走る道は縦横にわかれ、案内人なしでは迷路に等しくなる——というようなことが、案内書にかかれてあった。私は幽鬼に満ちた穴ぐらを想像した。

食堂は七時半から始まる。私はこのホテルに泊って以来、既に四日、いづれの朝も、食堂の最初の客であった。その日もまた、食堂の一番乗りは私であった。細長いテーブルに白い布をかけてあり、

その上にコーヒー茶碗とナイフやフォークが並べられている。私が入っていくと、早速エプロンをかけた女中が小さな戸口から出て来て、「よくねわれましたか？」と愛想をいった。

しかし、その時、昨日のテーブルの様子とはちがうな——と私は思った。隣のテーブルには家族連れが子どもを含めて五人で占め、私の背後にある小さな丸テーブルには夫婦ものが向い合って坐り、それだけしか泊っていないこの小さなホテルでは、昨日までは私ひとりでの一つのテーブルを占めていたのである。ところが今朝はちがう。私の向いに、一人前の食器がおかれてあった。誰かな、新しい人は？　と思ったが、別にそれ以上気にすることもなく、女中の持つて来た籠から、パンを取り出して私の皿にのせた。

その時、私の入って来た入口から、黒人の女の人が入って来た。そして、ちょっと自分の席を探すように目を配ったが、女中が「どうぞ」と指さした私の前の席へ歩いてきた。ピンクのワンピースに真っ黒な顔と白く光る目と、赤い唇とが対照的である。その唇が頬笑みかけるように開いて、彼女は「グッド・モーニング」と挨拶を

した。私は、ちょっと慌て加減に、ナプキンを膝から取り上げる
と、椅子を立った。これは、ヨーロッパで学習し、既に反射的にな
っている習慣である。

「私はバーバラ……」と、苗字の方ははっきりとききとれないまま
に、その黒人の女は自己紹介をしながら、私に手を差し伸べた。私
もそれに応じて握手をしながら、「日本から来たドクター・ヒライ」
といった。そして「どこからあなたは来たのですか？」

「ニューオーリンズ、アメリカ合衆国です。」

「留学ですか？」

「いいえ、スペインから廻って来ました。スペインで少し勉強して
いるのです。あなたは留学ですか？」

このような会話から、次第に話題はスペインのこと、日本のこと
に及んだ。

「私はぜひ、日本にもいつてみたいと思います。いけるかどうかは
わからないけれど」

「何故、日本にいきたいのですか？」

「日本人は非常にやさしいときいていますから……」と彼女は即座
に返事をした。

「日本人が全部親切だというわけではありませんよ」と私がいう
と、

「それは、その人の受けとり方ではないでしょうか。いつも神に感
謝できる人は、多くの人を親切に思えるようになると思いますよ」

そして、私の問に対して、新教徒だと答えた。私の仕事につい
て、彼女はきいた。

「私は、子どもの仕事をしています。それは精神病理学というむず
かしい学問で、実はドイツで一年勉強してきたところです」

「あなたの専門について、私は理解する力がないけれど、日本の子
どもは可愛いですね。アメリカで何人かの日本の子どもを見ました
が、どの子どもも可愛い……」

これまで、私は黒人とこうして差し向いで話したことは一度もな
かった。東京で会った黒人の兵隊は、そう言っては悪いけれど、何
かうす気味が悪く、知的にも低そうに思えてならなかった。

しかし、こうして話合っていると、彼女の心根とか、教養とか
が、親しみ深いものに思えてきた。一体、いくつくらいだろうか、指
輪をしていないから独身であるにはちがいない。身なりもよく、こ
うしてアメリカからヨーロッパに来て勉強していると言えば、金持
ちか教養のある女性にちがいない。

話が進むにつれて、顔の黒いことも、異様ではなくなり、むしろ
愛きょうのある美しさが感じとれるような気持ちになっていた。

「私は、子どもが好きです」と彼女はいった。「何か子どもの仕事
をしようと思つて、そう、一度は学校の先生になろうと思つたのだ
けれど、今は、美術のことを勉強しているのです」

「ご親戚に、子どもさんがいますか？」

「ええたくさんに。私も黒人には子どもが多いのです。私も、六
人兄弟のひとりです」と彼女は美しく笑った。口もとがほころび
ると、一そう紅が浮き出してみえる。頬骨が少し飛び出して切り立
ったような頬は、彼女の知性とびびりしているように思われる。
パンをちぎる手も、きゃしゃに磨き上げられて美しい。私は、非常

に親しみを覚えた。

その時、

「明晩、何か御予定がありますか？」と彼女がきいてきた。

「いいえ、特に……」

「実は、オペラを聞きにしようと思うのですが、ご一しよにいらっ
しゃいませんか？ 『オセロ』です」

「それは素晴らしい。このイタリーでオペラを見たいと思ひながら、
それをどのようにしたらよいか、わからなかったものですから……」

「では、私が切符を手に入れましょう」

彼女は、そう言つて上目使いにちよつと考え込むようにした。

その時、二人にコーヒーが運ばれてきた。私はポケットから煙草
を取り出し、その一本を箱の入口から誘い出しながら、彼女に差し
出した。しかし、彼女は「有難う」といつて、首を横に振つた。

次の日は、夕飯を共にして、この宿からカラカラの浴場にある舞
台まで自動車で行くことにした。オペラの開始は、八時である。そ
の時間が、何か私には待ち遠しいように思えた。

*

二日間、私は自分の計画に従つて、ローマのあちこちを歩き廻つ
た。しかし、折に触れて、黒人の女が頭に浮かんで来て、そ
れが次第に多くなつた。古都の道を歩きながらも、この道をあつた黒
人の女と歩いたら、どうだろう——ふと、そんな情景を頭に描きな
がら、こわれた土塀を右に左に、軽いほこりの立つ道を快く感じて
いた。

オセロを見に行く日の夕方、私はいつもより早めにホテルに帰つ

て来た。それまで、彼女と行き交う折がなかったので、切符のこと
など、どうなっているかという思惑もあつた。或いは、彼女の方が
気にしているかも知れない。ひよつとしたら、あそこだけの話で、
彼女は別の行動をとっているかも知れない。——そんな不安とも緊
張ともつかない気持で、五階の私の部屋までエレベーターを昇つて
いった。

部屋の鍵をもらいにロビーにいくと、女中の人が相変らずの白い
エプロンをつけて立っていたが、私の顔を見るや、台の下の方から
紙の袋を取り出して、シンシリー嬢からです——といつて渡した。
彼女からのもので、袋の上には、ドクター・ヒライと書いてあつ
た。中には、確かにオセロの切符が入っていた。

「お嬢さんは、部屋ですか？」と、私は彼女の苗字がなおはっきり
しないままに、お嬢さんということばを使つてたずねた。女中の入
は、ふつと振り返つて、後側の箱の中に鍵のないことを確かめると、
大きくうなずいた。

私は、彼女の部屋の方に歩いていった。それは、階段を中心に、
私の部屋とは反対の方向にあつた。三つ目の扉、五〇七号室であ
る。私は、部屋の番号を次々と目で読みながらその番号の前で立ち
どまり、ちよつとためらつた後に、二つ程ノックをした。

「ちよつと待つて下さい」と、中から、彼女の声が出て、まもなく
とことこと絨緞を靴でふみしめる音が五つ六つ響いた。そして、私
の手許で鍵があく音がした。彼女の真つ黒な顔が、戸口に現れた。
昨日とはちがつた、簡単な服装をしていたので、何か首が長いよう
に感ぜられた。私が、切符の札を言つと、

「私も、今夜を楽しみにしています」と頬笑みかけた。「自動車だと二〇分でいきますから、七時半に出かけましょう。夕食まで、私は、ちょっと仕事をします」

「では、また」と、私は彼女の差し出した手を握手で返して、自分の部屋に戻った。そして、いつものように、ベッドの上にごろりと寝そべった。

黒い人——私には、これまで一度も口をきいたことのない人種であった。親しみも感じることのない人種であった。しかし、わずかな朝食を共にし、今またわずか一―二分の面接だけで、どうしてこう親しい気持が湧いて来たのであろうか。旅愁が私の心をとらえているのだらうか。いや、旅愁は既に私の心から消えている。ローマをあと二日で去れば、アテネ、カイロ、そして東京につくまでに、もう一週間。私の心は、故国にいる妻や子どもに会えるというだけで、そわそわしているといってもよい。一年間の別離も、もう週日で終るのだ——という期待が、大きく心を占めて、それが連日の張り切った行動を促進しているといえる。

ところが、彼女とのめぐり合いは、私にと

っては、意外なほど強く、心を牽かれることになってしまった。それは何故なのだろう。

私は、天井の四隅のすすけたようなしみをしながら、彼女との不思議なめぐり合いのことを考えた。もし、結婚していなかったら、独身であったら、このようなめぐり合いから、彼女と結婚するような気持にまで発展していったかも知れない——私はこんなことさえも考えた。

私どもは、連れ立って、定刻に家を出た。彼女の静かなものごしをかばうようにして、私は自動車に乗った。

星の降るような晩であった。木で組まれた椅子に、黒人の女性と隣り合って坐りながら、カラカラの浴場の、こわれた壁の背景を舞台にして、一幕・二幕と進んでいくオセロに、どんどんと引き込まれていった。星にも届けと、歌い手を声を揃えて歌いまくった。そして、オセロは妻を殺して自殺した。

幕が閉じて、さかんな拍手の中で、彼女と私とは顔を合わせ、目を合わせた。私は、何か感激が衝いて出て、涙ぐみそうになって、慌てて空を仰いだ。流れ星が一と筋、長く光を引いた。

幼児の教育 第六十巻 第一号

一月号 © 定価 五十円

昭和三十五年十二月二十五日印刷
昭和三十六年 一月 一日発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行者 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌ご購入についてのご注文は発売所
フレーベル館にお願いいたします。